

平成22年9月7日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会



『進修』第35号(1932年刊)のカットより

連日記録的な猛暑が続いたこの夏、皆さんの夏休みは如何でしたか。まさに暑さとの闘いの毎日であったと思います。かつての日本の夏はこれ程暑くなかったような気がします。ここで、校友誌『進修』に綴られていた生徒の作文の中から、土中生の夏休みの様子を窺ってみたいと思います。『進修』第4号(明治36年刊)に掲載された当時2年生の「消夏日記」の題で書かれた鎌倉地方への紀行文を引用してみました。それは、今の一高生にとっては想像もできない世界の話かも知れません。遠い昔となった明治の土中生像の一端を垣間見ることができれば幸いです。

僅かな草鞋銭で、いざ鎌倉へ

「日頃待ちこがれたる暑中休暇とはなりぬ、されどこの長き月日をたゞ徒らに打過さんもいと口惜しければ、余は親しき友の笹本氏と共に無銭旅行をば企てにき、(中略)わづかに草鞋銭のみを持ちて横須賀・鎌倉地方を跋涉せむものと、七月二十二日の朝まだき土浦を出発し、八月六日の日暮る頃、つゝがなく歸宅するを得たり、今その一節を記さん」という書き出しで始まり、七月二十八日には、午前中、高德寺の大仏を見、七里ヶ浜で海水浴をしてから腰越を経て片瀬に至り、龍口寺に詣で、更に江の島の市杵島姫を祭る宮を参拝して、「此所の名産なる、サビイのツボヤキを食ひ、又ひるげをすすましぬ」と一休み後、横穴の辨天を拝し、洞穴を見学、「この穴は富士の抜穴に続いている」という案内人の説明に「案内者の法螺は、この洞穴よりも大なりけり」などと少年らしい茶目っ気も見せている。

江の島を後にし、腰越の満福寺、鎌倉の極楽寺に詣でた後、壽福寺にも足を運び、さらに「亀ヶ谷を過ぎて建長寺に至り、詣でんとすれば、早や扉を閉ちて見えすなりぬ、されば宿せんものと、此所の警察署長の家に至りしに、民家に非ざれば、泊むる事得ず」とはらる、其言葉のあらあらしく、且無情なる、其職を省みなば、實に恥づべき事にこそ、此度は町長を尋ねんと思ひしに、こは戸塚より通勤すとのことなれば、そこまで行くべくもあらず、助役の家いとゆたかに見えければ、之に赴き一泊を乞ひしに、氏云ふやう、安き宿屋を案内するは出来得れど、泊むることはかなはずと、依て大に途方にくれしが、勇ましき海国男子、いかでか之に屈すべき、さはいへ、空腹には耐へ兼ねしかば、飯打ち食ひて此度は師範学校教授、川口先生

の家に至りて、一泊を乞ひしに、氏は極めて深切なる人にして、心地よく話されしかば、これに一夜の夢を結びぬ」

七月二十九日、七時宿を辞し、建長寺を参り、鶴岡八幡宮を訪れて、ここに所蔵されている数々の宝物を見学した後、頼朝の墓を詣で、さらに官幣中社鎌倉の宮を拝している。「これにて鎌倉はほゞ見盡しゝかば、此度は横須賀に行かんものと、金沢に回心…」

横須賀では、軍港に停泊している戦艦の壮麗さに感嘆し、「午後海軍機関練習所を一覧し、それより市内を散歩せしが、水兵の往来いとしげくて、なかなか賑かなりき」と旺盛な好奇心を満たした。この日は友人笹本氏の親戚前原氏宅に泊まっている。

七月三十日は、前原氏に依頼された水兵の案内で造船所を見学、「其装置の巨大なる、其職工の巧みなる、いかでか驚かぬ人のあるべき…」と幾多の工場群の広大さに感嘆している。午後は軍艦を案内してもらい、その巨大さを「筆舌の尽くす所にあらず」と記している。

この後、安針の墓などを訪れてから「金沢に達せしかば、此所に泊らんものと、小学校長を尋ねしに、不在なればとて断らる、さらば村長の家にて行きたりしに、こも横浜に来れり」と泊るを得ず」

次に金沢文庫のある称明寺に申し入れるも「避暑の来賓多くして家塞がりたれば、他に行かれよ」と僧の門前払いに遭う。仕方なく一里半の山道を越えて富岡に赴き、「又も小学校長を尋ねしに、此先生様々のいひぬけのみして、泊めざりしかば、…」という有様であった。困った挙句、駐在所の巡査に窮状を訴えた。親切な巡査は夕飯を馳走した後、「余が家は狭くして寝るを得ず」として、旅館「金波楼」を一人十銭の

格安料金で泊まれるよう掛け合ってくれた。当人たちは「此所第一の宿に投ずるを得たり、げに可笑しきことこそ」と呑気な文で鎌倉紀行部分の作文を結んでいる。

今でも「無銭旅行」は死語にはなっていない。若者たちのヒッチハイクや寝袋持参のツーリングは盛んだ。それにしても、明治期の中学生の無銭旅行は想像を超えるものがある。紹介状もなしに民家に宿泊を求めるところを当然のこととしている。突然の見知らぬ訪問者に宿泊を申し込まれた相手は、大いに困惑したに違いない。鎌倉の警察署長さんはおそらく官舎住まいであったようである。「民家に非ざれば…」と断ったのだが、その言動を含めて「實に恥づべき事」とされてしまった。

学生のターゲットになったのは地元の名士であったようだが、迷惑なことに変わりはない。町長さんも小学校長さんも口実を設けて断っている。

当時、中学生も含めて学生は一握りのエリートであった。川端康成の「伊豆の踊子」に登場する一高生にその典型を見ることが出来る。しかし、帝大生や高校生(旧制)はともかく、中学生となると、都会と地方ではその評価には差異があったのではなからうか。

まだ、ごく一部の子弟しか進学できなかった地方の中学生と先進的な京浜地方に連なる鎌倉あたりに住む人々との意識のずれが文中に見え隠れしている。

しかし、一方では中学生でありながら、実に旺盛な探究心をもって名所旧跡、神社仏閣を尋ね、ここでは省略したが、鋭い観察力を駆使した見聞録を記している。こうした先輩達のDNAは、良くも悪しくも何らかの形で現在の本校生に受け継がれているようにも思われるのだが…。